

マーケット・アイ (99/6)

視点・株式市場

店頭市場、そして上場小型株の一部が急騰している。眼を見張る動きを示している一群の企業がある。これらの企業群のキーワードを探してみたいが、その前にそうした企業の株価動向をピックアップしてみた。(単位:円)

企業名	本年安値	24日株価	騰落率
ファストリテイ	1980	11000	555%
アルゼ	2360	9900	419%
光通信	6900	32300	468%
ジョイント	1210	6110	504%
マース	850	4050	476%
角川書店	4700	21900	465%
ライトオン	1420	6550	461%
ドンキホーテ	11700	44900	383%
ラウンドワン	475	3555	748%
ゴールドクレス	4240	20000	471%

(順不同、銘柄は豊島が任意に選択。また全て50円額面に引き直して表示)

今年の安値を1月～2月に付けている企業が殆どだから、たった半年も経たずに上記のように何倍かに上昇したことになる。上記に取上げた会社はほんの一例であるが、大きく上昇した企業を私流に解釈すると、(1)会社が小さい(2)経営者がオーナーでサラリーマン経営者ではない(3)独自の経営哲学と明確な経営戦略が見える(4)業種・業態などはあまり関係ない 上記企業に不動産会社が2社入っている(5)収益性が高い、ことに集約できるように思う。

先日、ソフトバンクの孫正義社長が世界最大の株式市場であるナスダック(米国店頭株市場)を日本にもってくことを表明し日本の証券界に衝撃を与えたが、こうしたグローバルでダイナミックな動きが日本の企業活動に更なる刺激を与えるものと思われる。株式市場は経済を写す鏡であるとか経済の先行指標であるなどと云われるが、激しく上昇した一部企業の動きは、暗雲の向こうに光が洩れ始めたことを暗示しているようにも見える。

今起こっている景気波動は、おそらくマクロ的に見れば厳しい波動であるが、個別で見ればビッグチャンスが到来している景気波動と捉えていいのではないだろうか。

「含み損」の飛ばし

日本の金融機関の弱み(損失を表面化させたくない)を突いて収益を上げてきた外資系金融機関に検査のメスが入られているが、問題の根は深く簡単ではないようだ。

かつて、そうした営業に従事している金融マンに会ったことがあるが、彼の言葉には暗然とさせられた。そこには「飛ばし」が常識となっている世界が垣間見られた。

16兆円が使われた

国が金融システム安定のために用意した60兆円の公的資金枠については、5月末時点で既に16兆円が使用され、この16兆円の内1兆7千億円が損失として確定した。この損失分は国民負担(税金から補填)となると云う。

これからの金融動向を推測すれば、投入しなければならぬ公的資金は更に拡大し、それに伴って発生する損失額は更に膨らむことになる。それは避けられないものと覚悟しなければならないが、折角の巨額国民負担が報われるような金融再生が図られるよう心から念じたい。

住宅ローン、審査力点移行

住宅ローンに力を入れている金融機関は多いが、都市銀行を中心にローン審査の力点を担保から返済能力に移し始めた。

担保担保と云っていた金融機関が担保の空しさを身に染みて実感したことが原因と思われるが、このことは、個人レベルにおいても「将来のキャッシュフロー」が重視され始めたことを意味している。企業貸出審査と同じ流れが起きていると見るべきだ。

普通預金金利6%登場

と云っても米国での話。米国でも決済口座(小切手を振出せる口座)の預金金利は現状1%前後であるが、ネット専業銀行で6%の高金利を付ける銀行が登場した。

もともとインターネット銀行は、店舗コストや人件費が低いメリットを生かし預金に高金利を付けて顧客を獲得しているが、このことは明日の日本で起こる金融現象でもある。普通預金を低利の金融商品と位置づけていること自体、これから問われる時代がやってくる。高コスト・低レベル・横並び、こんな金融機関が生延びて行ける時間はドンドン短くなっている。